





世に室の入道風雨を纏むる
 業一といひ出るふしとまゝともぢ
 何れとなく帝のくさし
 かしと一書ちりう流なをた
 骨柳一合をあたておこ
 一ううも骨柳始る君乃
 くるさすも一きしあはれ
 て物を所すうれをそ及古



製してちりて補えんとす
くこり木幣口外ありて希
有のふゆすいろれ用むと
のへんり新まこりぢふる
ぢうれとこ入るの曰新まこり
あふまあ〜〜ち〜
紙屑のゆ〜芳〜
骨柳とてその骨を納家

か新しとた〜年以
おひいその〜と草
毎下小〜なるや
おひ〜の集
つ〜ふは太原の新秘
稲穀籠のひとし極
長物ある〜
た〜い〜

うそいもくを称し我う才ふしちあひ
あひくぬる早あり糸あれを木子
のほむんのかあひと秋もまし
あつしあしきふん—うれえつて
次才—とあつてあるよ二好うら
なるんもつてしてあつてあつて
めつて—とあつてあつて
つうちす時—大原の新橋

いさしあれとくあつてあつて
あつてんとあつてあつて
あつて—と—あつて

いさしあれ

とく保土原の年—

水世の月夜の日

穂秋瓶

苔室草丸句竹

春の部

大川を流るる春の波を〜 似てはる

初明

木につくしは〜た鳥の新〜 地

道は葉の林下を〜 松奇乃浦

元日をけし〜 解〜 二日々ふ

美菜や花を〜 霞ふ袖を〜 少

小松箋

あふれを友に引くは小川を
小川引人よふら子雛子乃尾

柳管柳

一番に神風の吹く柳を
咲柳の葉をえくは春乃露
雪にけり鳥問をや鹿鹿の神
ふ久ふまを真まきまぬくを

青柳のさきのふらと消を
柳の枝誰の枝ともなくをよ

天長地久し唱へてあふとや

買り代りたてしにまき柳を
家たちし湖をうねるす柳を

疎き水の徳をうへ水の

徳をうへて疎の徳をたふ

葉をうへてあふにてもあふ柳を

極く余念をこころしむるに
又て居るに

のつとく 春風

うすむ書 杖よりこころを
海若にならば
夫の心遠くもゆく人
杉苗や久く日一を
芽を吹や葉の木
去るやあつと川せ

永き日 春乃日 夫の月

永き日や居るを
永き日や盆乃陀のいきし居

修局の事仕あるのく

重舟杖子山菱笠

福くむまの縁路に園

寺

永き日や仁王も力

たうたのやえりて居る人の歯のぬらぬ
夫乃月や柔木の東て袴をく
と袋のやりの式方の桐——春日

あつたに味のたまはる

えしてやいあくら西を記

たのふとをまそ又たあく

春のやい——ひてあ族水の泡

山鳥の屋をニ度ま——く春日

聲をけし叫ひあきをや春の月

蟾のあやも雑子のあも

六川こへのあ心のうあも

あやあああ

吟を講の屋根にのら族やまの月

閑のさ——あもまめあ

あ——ああ

春乃月あくらた濃く紙乃と

急角して少く造りきくすん
たふふささりるささしうきしの草

目川の名物木の芽

茶うゝるさ

呼きしに袖もあつてななな
早に腰をえといひうりきすん

磯室にあそびて二句

水浴子りりくおふささすう形

磯まきり鳥さすすう雑子のうけ
たふふささして右き田可い

葛城の神の国に

樗牛の言のやふに

這ふ田可いつきのなつ鳥のな
子年もいきなみ乃田可うちま

雲雀 冬の葉

井をよめて上々に産むる雀うね

子形に志をくし流るる正を色に
看ししありくち乃きく雀一つ
鳥ふくく木をもたむを色に
鳥乃東つくとくすか涙く二候
しり川さぬく
まわぬ時極くす候し
つふ山中く
葉のぬきのを居に自ふあくく葉

花 さくく 極

昼の志あるふとありしこほんく
あくはくた葉も當をえくあま
あまの身にたくく候さくく
嘆ぐくもあまは隈あき出くく
因果經を記き居し

あくく極の雲きくく候にく

まふあくくく候

とく

七

首すまの臺子似る母離りて
連翹や蒼苔すす處に咲くい花

神部社

月日と花 秋乃多や夏 鶉

恋

海菜やと糸乃魚と而る存
花の角 幸夫の茶子居てあは
り夫にふ花風河山 象より子

火とも〜にくまらハ

の示もまふし

示〜き〜盛おめさの飯に啼

短枝 夏の日

み〜う枝子ほちる〜枝ほ〜ん〜

短枝や月あ〜に木めをふ〜

〜〜う枝や枝一本志ん〜

短枝や枝と枝枝〜のひる 相

夏乃月涼氣と木あ〜家所〜

涼あ〜た足あや多くの夏乃月

紫あ〜

紫あ〜や十〜に白のあ〜花

あ〜陽あや貞を〜出〜 意あ〜

五月雨 五月晴

月に〜あ〜枝桐の栞葉や 五〜雨

中〜雨予投す〜に〜五月

月日に昇るあけすけ

黒髪髪々白くなると

髪も今更々くすくす

つまももさふあつた

つらつらの上に

腹痛の葉やまこ五月も

のく茶井

入柄をいかに尾行く

蚊

大膽ふとあつた蚊一疋

経々を壺乃中にけり

うらやまひし事

序むのほろと

浦山一蚊もはきき

夕立

夕立をとりおさ

這ふ葛や東ぬ夕立を恨く
夕立や萩をさつさし音川
五平

二尊院にけりぬ

夕立ちやさやくた白ふ
桶の蓮

流あをふ流帯しよめ

あしをさつさつをくく

白雨の涼しくあふ秋辛夷うき

酒涼 火とを虫

逆に木の影もせよ夕暮り
涼しさのさし使ふさ心とさうふ
喉をさし果然おろろとを虫
根も休ます事や心とらへ

浄後

人々白おろふさつさつ 浄後す枝
浄後しし涼つさつさつめ
魚多の目もさつさつ 浄後川

くはく

青もも 交るいそやめめ ワクは木うか
口の柳 下戸とあそふもよる日ころ
杜のあまてもんくうを小窓こつふ
灌佛の水もをくくえ 不二乃山
既子あめ芥子に今たくいあもえつ
わのむや痴あまていそめほくこらき
筆とさるもあくぬ 使ふ筆

櫻子のやそやをゆるきのまろ先
おろす時あまのすくくろるふあな
あま子を植てたれむ
あつらひんくくあふ
せ死を植くろかめむ
りくくくくくくくくくくく
と植てかきうあのをん
あろを石合のこちくくあま子乃中

清き月の花を色敷き若きうちま

蘇波よきくくく色味を

くくくに越し其乃乃自

石井のむらつ井いよ太ふ良結町

七丈るめくさくして

流うふ母らゆらに佛の日わうを

蒸乃そふにス息と吹くさる難

さくくくをのやうきな無難亮

屋根のま後ふり咲か相乃花

獨坐

家ら海又ぬらき毒りの山鶴赤

田乃中にきくつりくの田植り菊

やーやめんしやとらや

いふふふのさくらめで

花つつさくさくやう出す蟬乃歌

水浴あふりし 隠にりすし 衣うち

陽垣とりのふもくくり
ひくくろくろくくり
引をきて神をく
うけやる子

志くくく確の木子漏く清
石昔小竹人仙く石然陳

幽窓

蓬乃香とひとやあをひの葉

あやしくまの志んを故ま
子子やまし虫とのあや
夕るやま確の先あく先
らるるを境く突たし

箱根山中

毛虫の東北きく熱目地獄うさ
確るをふり多くくく寒く
管平ま乃くく胸毛吹

卓池亭にありて
の長橋乃夏中

板の涼し
遠山の天狗もこさし
お月千鶴の着るもあは
な乃日や糸の卯の産

草津温泉

流るるの白心を

花秋籠

秋の部

秋、川や釜のあつきのり花
今秋の秋益人追々庵に

七夕 朝貞

七夕のふあつ川し 煙子
十系をうけて繁る星むく
ひとり嘆息点のむ気病ふ

朝貞のあかくはき 嘆み
朝貞乃ほきのあつ川し

痛 縮 妻

ととる波の 痛にさきく 秋の
おろふを痛しむるは ひとり
いふ妻のうさして ひとり

義 仲 ち 二 田 齋 せ び

縮妻の 硯にや 板を ひとり

林風 蛙吟

杖乃風 聖を吹ぬ日も一衣を吹
膝の穴乃垢まじ吹やち龜の風
稚の眉を云とらけ申居る人あか
まふ月一 此子休む世くはあ
静ふ川と映して居ぬ蛙吟う家
々々井戸をあ々吹にぬくサセうあま

芭 芙蓉 枯梗

素葉を初ふ時 仲戸

原の酒を河のきりし

ちくくふをたりけり

住徳路の日あくに示をうかす、
おく家もさ々に芙蓉乃日あく、
余亦に傳あつてもあはる芙蓉うあま
見ぬうまひ色のふまう 枯梗うを
冷くしちくをえあは 枯梗 糸

うつら

うふに柔のこころしなむらめ鶏うふ

地のまにのほこし

うらうらやまをぬく見ゆけし

月

あめをしくふ思ふ月のまろくそ

夕露と白も洗ちしりふる厚

今月の月望をまけて木にうけつ

うふ月星のこころのまもりあま

五十鈴川のまをまろく

平くたを

あつあつの流をくそりしりふの月

十又板鏡

寺の中に流て鏡のあまをこころ

名月や葉をそるちぬる津在

ゆりやいつましつきまめり都ん

不貸の百の銭を

二枚にやして

はしつきてワリに雙し可石うち
程うら音そくほむら 右ニ、里
きぬさち軟くく留けしつ妻のま

つら鳥 紅葉 菜

ちつらつらふらくくす枝あし
一ちりいづきそさつくや渡り鳥

山のうらむまふそを川 紅葉
名あり木乃一本をやり枝紅葉山
山雀のつくくしをゆるもくくうふ
木はく西をを送る

まふふ人よつりてはあくふ
武者腰りや系につれて

伊豆の山中に月篇す

一海をくりにてまきくのはるを来

山の麓ふりーの人乃ス〜

暮秋

つづつの上と毎日煉乃く川
人を花魁のらやあまのくさ
さくほくの蝶と取らるるお

くさくさ

きみふさふさ〜
露まの刃にくさくさ〜

萩乃心あま〜
故屋に似る白いもあまの
は〜やあまの休む 竹乃中

萩寺のいね見にり

乃に念珠を拾ひて

朝さあや日木の相を贈る
鶯籠と石にともを萩と
秋乃水園につら〜

墨乃江

と川ゆと神も出て海もふく

心標に存る

塩乃山一ふも降くろまあ山子

竜橋や土くすもあこまあし

つう苔室

り燈こえあやあふのあまを

嶋吹きくしてつみくろあ乃病

わやぬ負みあなあふを酒代未

粥も裡もくけとあろし水

日餘や味のくをくあ唐くし

同是れい蕎麦の志くく我う相

又月十五日不二山と

い合目に宿す

羨おとりえき山乃と雲のしと

穂粒福

冬の部

えうあさやそりしとえつあゑるを介はる
 葉の色とあひのちううや初しり
 えつあゑるを介はるあひささささ
 けり目あもちうさぬものあさつあひ
 草の這ふ乃ううあひのちうりうを
 川くしあひあひさささ追し来ぬ

茶の志 松野

茶乃をや草ふともふく折こり
茶の花や土も芥も浴くま

何をとりぬん

何をとりぬん

平内り石の妙に伝ふ松野うふ
美しく袖干日の入候り此野茶

風 小春

木々々々々松原の果乃永平寺
木枝や宿くまこり裡 葉枝
風や木の福ふと介あちちむく

江のやまうを鎌倉まで

りりり七里の浜とや

鳥の先につくして

流るはす小鯛の魚も小春うふ
舟と出り人の用なを小春茶

ふとや 類 高嶺

暮らたも皆新しし花あらう家

自白のたしあふと

花乃さゆあはし

ふらふもあふとさふん子鳥たし

美しくさけさうくすや朝ちとを

ふに花は「おらうふんあふさふ

ふ人のもあふに似あや飯乃類

くあふと一人の現る 飯乃類

吟さしあふもふあぬ生あふ

あふさふもあふの香乃さふ生あふ

あふさふ 冬の月

あふさふの住さの松あしくを枝

淵の煮やし 雑炊の

うらんま煉くあふさふ

押さも化しけりあふさふさふ

きの月より川に程白ふ杉
まろ乃月末ふと解川て救の木

蛭子傳 跡くも

ふふと飯の毒うまゆ候。蛭子傳
蛭子傳 鳥木も 又 富貴 貞
を舟にあくそうとすけ 鈴 叩

ほせしえぬも山とえぬも

跡たを聖いうつらを死ぬる愛う

まゝ 寒

を介言のりふも白ふりり高志
初まら波の流るる波の 湖

二裏乃山に狐守り斬の小

流呀くくくくくくくくく

氷を流くくくくくくくく

棚の神海をさけし夏の

都にふ入る良薬とす

まのまの夜まや ぞ著のまゝを
鶴のまゝ 枕もあくたのまゝ
五匹の月も 邪まぬさゝまゝ

神部社頭

まゝくくく 神の黒ま ちまき ちま
くくく

那々を 神のまゝのまゝの 水
こゝろ 舟の枝や 地乃 葉

ま度も 杖と 枝と ありの
まゝくく 葉ま ちま 枝ま 水
坊のまゝと 根ま 人 根 葉
まゝくく ちま ちま ちま

難き言に 似し言

小もあつた ちま ちま

山と 菊のちま ちま

洗ふくく 菊に ちま ちま ちま

十月十二日江戸より

うらまへしうらまへ

襦ろくろ袖し色夜更像のあ
床しりく川の茎も似しうらまへ
うらまへしうらまへの若もあは改中か
今うらまへしうらまへ
うらまへしうらまへ
うらまへしうらまへ

うらまへしうらまへの後うらまへの
うらまへしうらまへのうらまへの
うらまへしうらまへのうらまへの
うらまへしうらまへのうらまへの
うらまへしうらまへのうらまへの
うらまへしうらまへのうらまへの

うらまへしうらまへのうらまへの
うらまへしうらまへのうらまへの

おしらく心とて暮るるまは
この果てのちまたのあまの
をよみかたに四五人

雑文集し

老にゆくは世をたふしむ夜忌の因
借おく人志とてあはれに
海を又て麻のつむぎをよ
さあぐてもよまをよむ巨

王母方朔のあまのつ

あまを壁にくけし

手つて川雀に驚かすの口も
りとも向を小あまの
実 粒

文政七年二月

うねるを土生の踊の甘きまらちま

嵐舟

蕙たよりー蕙舟の子

草丸

花のまやうろ酔のきき初し

、

組月々の短減りまゐ

あ

互頃の糸木をとりおはくつり

、

堀く糸を小筏に積

丸

繪曆に彼等の入を又あしらす
 とつて中既り嘆々追従
 二階くつ折し落す右首
 箒のふり流ふ昏 神 丸
 情し留致ぬ愛を待えく
 言心是汰のき調乃里
 精進の心とていしり月
 赤鶴殿に並人り来り丸

石たる起座く起名と出やくに
 馬所の出入の叶ふ式
 極木屋の極身くは、杖の
 水ぬるくは、微の館 丸
 借貸と誼しけり事奉者
 あそりくあへ、而燕の神
 けりみのまにまぬ 虹刺
 埋火 丸

葬礼の傘をふるに合すし 丸

日しをぬた股をとりぬ 丸

追剥のほくろをぬ 丸

誰か焼くろ急の朋く 丸

朝夕の縁増物ハ本く 丸

月のくこもぬ四月一丸 丸

芥子のくお袋の底に穴をあぬ 丸

春も春しきて春も 丸

名のまらぬをやく病をとりぬ 丸

糸の群の柳をよぐすぬ 丸

くねまれ枚子果報の白ふれぬ 丸

まろくつゝ牡丹芽をもち 丸

花ぐらひぬし解れぬ高麗ぬ 丸

清水にぬれぬ雉子のま 丸

仁孝一筆

美しき世のとにありて不世の山 三の丸

雲のしらめのふき青雲 庵の丸

ふ乃香の草白乃餅の印ありし 丸

内し春の草 春乃犬の子 丸

朝乃月焼やの埃り消くた 丸

堀くをきりて人ありてや 丸

肩衣のつとをきりて後につま 丸

自家茶に坐る 喘息丸

あつしをて世のあつてな年のく 丸

夜明けくまの暴れ物し 丸

原ハの渡りをつとる 宿之干 丸

杭を田にうらををのぼり 丸

五日くまのまの月乃 丸

い川をり秋の山をき 寺の丸

壁とれは屋根をきくしき 丸

入りのさくきり 町役の跡 丸
 ー又花に持たふ 濃桑つた 丸
 心への名に裡 ありり 丸
 寮の内巨峰は 露の 一筆 丸
 子のえり小工 面を 碎宜 丸
 玉生乃里 姑朝 束の ぶあ 一 時 丸
 ー ー ー 物を 振 賣に する 丸
 多岐小舟の 志 ありき 多 过 佛 丸

心をさして 眉をさつ 丸
 黄いふ人 志 ありき 多 出 丸
 八卦の 志 ありき 多 丸
 後ろ多へ 貝の けり 美 丸
 病も つくすに 昼乃 朝 丸
 之待ハ 秋の う ち 丸
 第 一 丸
 井戸 つけし 社 丸
 丸

GANSHODO SHOTEN
KANDA TOKYO
田神京東
店書堂松巖

早稲
長曆
中家
田入
水

リ
キ

廿六日

酒あふりし春やぬ田己年 舟
鳥のやすき場末ありとも西より京 丸
川波のはくつ々きうの花もあはれ 丸
奇舞妓のあまの土筆えんや 舟

